

「私の戦争体験」

大綱晋太郎

私が初めて戦争を知ったのは昭和十七年春に隣の「おじさん」(籠野勲さん)の英霊が私の父の胸に抱かれ、家族は勿論近隣の皆さんの涙の中に帰還された事、その光景は七十五年経った今もハッキリと私の心にきざまれております。

そして翌十八年春に私は国民学校に入学しますが、その一か月後に父は満州事変、志那事変と三度目の召集令状により、出征しました。その見送りに私も同行しましたが、二キロ程の玉川橋までが、最後の別れとなりました。これで私の父、五兄弟の中、末弟を除く。四人の出征となった訳です。(二男の叔父は満州事変で戦死)終戦後遅くではありましたが、三男の叔父が帰還してくれ、父と四男が帰らぬ人となりました。

その間、戦況は悪化の一方となり、厳しい統制のもと食料、生活必需品の逼迫は大変だったと記憶しています。私共の

通学靴は自家製藁草履が殆どになっていました。幸いにして私共は自営農家だったので、米、麦、野菜、養鶏で何とか凌げたようでした。でも、その農業も男手がなく老若男女総出で続けられ、大変だった事を思い出します。一方、食料を求めて大阪より買い出しに来られる婦人が衣類、靴などを持ち込み、代わりに麦、芋、野菜と物々交換されることもしばしばありました。何日かの食、大変だと思いう事でした。

そして昭和二十年を迎えるや、三月ごろより大阪大空襲がB29爆撃機によって爆弾や焼夷弾を雨霰のごとく投下され、かたや艦載機グラマンやP51マスタングの襲撃が頻繁になっていました。夜間にあった大阪城周辺の爆撃は夜空を真っ赤に焼き尽くす。本当に恐ろしい地獄絵でした。毎日のように空襲警報が夜昼なく鳴り、その都度防空壕に避難し、昼はB29が

通過するのを見、夜は灯火管制の下、黒化粧した電燈下で家族が寄り会って過ごしたものです。

恐怖の7月9日の正午頃、授業中に空襲警報の発令があり、慌てて、学校を飛び出し、帰路につくと唐崎班下道組グループが学校より四百㍍位行った所で艦載機p51の騒音が聞こえたので、二つに分かれ私は麦藁木積に6~7人が寄り添う、あと5人が野菜畑にうつ伏せに伏せた途端(南方より三嶋鴨神社襲撃の後、北方三百㍍位の所)超低空でp51が機銃掃射してきました。



P51の騎手の顔も見える程の目前20㍍位の事、射撃音や光をも見え聞き、本当に生き地獄でした。

幸いにもこの至近距離の銃撃にもかかわらず誰一人の怪我もなく

有難いことでした。

その光景は73年経った今も忘れられるものではありません。

以上私の戦争体験終わります。

終わりになりますが、今後もこの戦争の悲惨

さをしっかりと伝え、この平和が永久に続く様に祈念いたし、結びとします。